

日隈信夫(中央学院大学商学部専任講師)

革新的企業における
イノベーションと経営戦略

－理論的考察－

中央学院大学商経論叢 Vol.29 No.1
pp.15～27 2014.9.

本論文は、まず、「イノベーション論を需要側(顧客)の視点(あるいは、市場的側面)からみた経営学的な後継者の流れから捉え、近年のイノベーション理論を整理」している。

つぎに、「進出した市場において構築されるイノベーション(革新)戦略、事業戦略、マーケティング(競争)戦略といった視点から、近年の電気通信企業におけるイノベーション戦略を比較考察」した。

こうした考察を基に、「今後の課題として、長期的なイノベーション戦略を考慮したあらゆるステークホルダーのなかのコーポレート・ガバナンス、また、研究開発など、原材料、製造方法、製品、販売方法、顧客へのアフターサービスなど、市場的(長期的)な側面を考慮したあらゆるステークホルダーのなかのコーポレート・ガバナンスを考察する必要」があることを指摘している。

最後に、「労働節約型のイノベーションといった社会的な(負の)側面に対して、現代のイノベーションは、必ずしも、あらゆるステークホルダーの利益に適ったものとは言えない(イノベーションの問題点・ドラッカーの限界)」と論じている。

本論文の構成は、「Ⅰ.経営戦略—企業と市場の関係—」、「Ⅱ.ドラッカーによるイノベーションの体系—イノベーション戦略とマーケティング

戦略—」と続いている。「Ⅲ.クリステンセンによるイノベーション理論と通信事業者におけるイノベーション戦略」は、本論文のなかで、最も重要性の高い内容となっており、「1.イノベーションの分類」、「2.企業の内部から外部へ①」、「3.企業の内部から外部へ②」、「4.企業の外部から内部へ③」、「5.イノベーションの中核的理論」、「6.『持続的イノベーション』および『新市場型破壊のイノベーション』の事例」、「7.『ローエンド型破壊のイノベーション』の事例」、「8.破壊的新規企業に対する既存企業による取り組み(製品戦略)の事例」、及び、「9.『価値次元の転換』をもたらす『ローエンド型破壊のイノベーション』の事例」の9項目にわたって詳細に記述されている。最後に「おわりに」として、まとめている。

本論文は、これまでのイノベーション研究の論文を丹念に読みこんだことが窺え、特に、クリステンセンの諸議論については、詳しく解説を行っている。また、「現代企業におけるイノベーションには、社会的な(負の)側面があることも否定できない」として、「イノベーションによって、生産性が向上した企業などは、これまで以上に設備投資を行うことができるようになる一方、こうした技術的・経済的な発展によって、企業の生産方法は、資本節約型だけではなく、労働節約型の発展を遂げる可能性もある」という指摘は、E. Brynjolfsson & A. McAfee (2012)による“Race Against The Machine”(機械との競争)等の論点とも重なり、大変興味深いものとなっている。

一方で、クリステンセンの理論のうち、「持続的イノベーション」並びに「新市場型破壊のイノベーション」の事例については、どちらのイノベーションなのか、あるいは、両方のイノベ

ションに係るものなのか読み取りにくく、もう少しわかり易い論調とする必要があるのではないだろうか。

また、「おわりに」において、「あらゆるステークホルダー」の視点が必要だとすることは、実際上不可能に近く、筆者なりの新しい発見、あるいは、見解が充分伝わらないのではないかと危惧される。

(東北工業大学ライフデザイン学部教授 渡部順一)